

嫡妻
本嫡妻

の御手にすぎり、おあし給り候へ、すまさせ給へとて、笑をふくみかけ申せば、秀吉公もことの外打ゑませたまひつゝ、さらば算用をとげ御すまし有べきとて、内へ入給ひしが、勘定の聲はなく、御酒宴と見えて、目出たや松の下千世も幾千代ちよく、などいふ小歌の聲々に、略下

〔新撰字鏡〕女嫡適同、丁狄反、主嫡也、君也、主也、牟加比女、

〔伊呂波字類抄〕人倫嫡妻ムカヒメ

〔古事記〕上大神命須佐之男故爾追至黃泉比良坂、遙望呼謂大穴牟遲神曰、略中亦爲宇都志國玉神

而其我之女須世理毘賣爲嫡妻而於宇迦能山略註之山本於底津石根宮柱布刀斯理、此四字於高

天原冰椽多迦斯理、此四字而居是奴也、

〔古事記傳〕嫡妻は字鏡に嫡牟加比女と見え、書紀に多く正妃とあり、此等に依て訓べし、牟加

比は正しく夫に對配意なり、物語文に、今の妻の生る子を、むかひばらと云るは、先妻と別けて、今妻をいへれども、本は嫡妻腹より轉れるにや、

〔源氏物語〕十むかひばらのかざりなくとおぼすは、はかしくしうもえあらぬに、ねたげなるこ

とおほくてまゝは、の北のかたは、やすからずおぼすべし、物語にことさらにつくりいでた

るやうなる御ありさまなり、

〔源氏物語〕三十九夕霧ほんさいつよくものし給、さる時にあへるぞうるゐにていとやんごとなし、わ

か君だちは七八人になり給ぬ、

〔空穂物語〕梅の花笠みかどさいなどもいづれをかゝるものすらん、おとゝなるたゞがげをなん

ゐてまかりける、それをおもひなくりなとおとゝたゝいまかれひとりをなんもて侍なる、ほんさ

いどもみなわすれ侍てとそうし給へば、いとけうあるねぬ御もとの人は、花のかけにすゑたり、

なかより御ふみをうちにいるれば、おとゝいと見まほしくおぼさるれど、えいり給はず、北方御

ふみを見給て、わらひ給ふ、